

2025（令和7）年度

教 職 課 程

自 己 点 検 ・ 評 価 報 告 書

日 本 赤 十 字 東 北 看 護 大 学

2026（令和8）年7月

担当

教職課程専門委員会

①

教育理念・学修目標

1. 自己点検・評価

(評価区分) S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。 C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
(1)	教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の策定状況	①具体的かつ明確な形で設定されているか	A
		②教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画と3つの方針との関係が必要に応じて意識されているか	A
(2)	教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の策定プロセス	①学生や採用権者の意見の考慮、所在する都道府県・政令指定都市教育委員会の策定する教員育成指標との関係性の考慮が行われているか	A
(3)	教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の見直しの状況	①一人一人の学生が教職課程での学修を通じて得た自らの学びの成果(以下「学修成果」という。)や自己点検・評価の結果、社会情勢や教育環境の変化等を踏まえた適切な見直しが行われているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

令和6年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。

「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査報告書により、基本的にはすべての到達目標において、継続した向上が見られる一方で、学校経営の視点や学校保健組織活動を実践する力が不十分である。また、法的根拠などについての理解がさらに深まるよう、事例に即して分かりやすい指導が必要である。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和7年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。

(1)	「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果(2025)をもとに、教員養成の目標に照らし合わせた自己評価がなされ、長期・短期の検証改善サイクルが機能している。
(2)	「秋田県教職キャリア指標(養護教諭)」をもとに、教員養成の重点や計画策定のプロセスに生かしている。また、県教委の担当者と連携し、本県が目指す教育の在り方と、それを実現する人材の育成を踏まえた協働体制を構築している。
(3)	履修カルテや「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」をもとに、学修に対する自己点検・評価を手がかりに検証改善を実践している。また、授業並びに面談の機会に個別課題に即した指導・助言に努めている。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。

- (1)「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査を毎年度末に実施し、カリキュラム評価を主目的とした集計・分析を行っている。
- (2)「秋田県教職キャリア指標(養護教諭)」をもとに、養成段階における育成すべき教員の資質・能力を明らかにし、具体的な指導内容に即した指導・援助が実現できている。
- (3)履修カルテや「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」をもとに、毎学年末に学生へ自己評価を促し、結果の集計や分析をもとに養護教諭を育成する上での指導に役立てている。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。	
【課題】	「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果(2025)により、基本的にはすべての到達目標において継続した向上が見られる。一方で、学校経営計画、学校保健計画等の視点や健康管理や疾病管理における保護者との連携方法に関する知見が不十分である。また、教員採用志望地域の教育理念や方針などについてもさらなる理解が深まるよう具体的な指導が必要である。
【目標】	到達目標の「人間性」「身に付ける基礎的な能力」「自己研鑽」等において、事前事後指導での学びと養護実習での体験を有機的に結び付けた具体的指導を強化し、今日的な課題を解決できる資質・能力を備えた養護教諭の育成を図る。また、本学の理念である「生きるを支える」をテーマに据え、目指す養護教諭像の具現化を図る。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。	
秋田県教職キャリア指標を抛り処に、着任段階までに備えるべき養護教諭の資質・能力を形成できるよう努めてきた。教職関連科目における学修を通し概ね達成できている。	
今後は、「学び続ける教師像」の理念に基づき、プロアクティブな保健指導のための実践力形成に注力し、学校現場で求められる質の高い実践に資する学びの充実に努めたい。	

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)①、②、(2)	履修カルテ
2	(1)①、②、(3)	「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果(2025)
3	(1)②	学生便覧
4	(2)	秋田県教職キャリア指標(養護教諭)

担当
教職課程専門委員会

②	授業科目・教育課程の編成実施
---	----------------

1. 自己点検・評価

(評価区分)S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(一)ハイフン

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
全「 ル体大 」レ学 「学科等 レベル」 「授業科目 レベル」	(1) 教職課程の授業科目の実施に必要な施設・設備の整備状況	①ICT(情報通信技術)環境(オンライン授業含む)、模擬授業用の教室、関連する図書など、教職課程の授業科目の実施に必要な施設・設備が整備されているか	A
	(2) 教育課程の体系性	①法令及び教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画と対応し必要な授業科目が開設され適切な役割分担が図られているか	A
		②教職課程以外の科目との関連性が適切に確保されているか	A
	(3) ICTの活用指導力など、各科目を横断する重要な事項についての教育課程の体系性	①教員として身につけることが必要なICT活用指導力の全体像に対応して各科目間の役割分担が適切に図られているか	A
		②到達目標や学修量が適切な水準となっているか	A
	(4) キャップ制の設定状況	①1単位あたりの学修時間を確保する上で有効に機能しているか	A
	(5) 教育課程の充実・見直しの状況	①学修成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しが行われているか	A
	(6) 個々の授業科目の到達目標の設定状況	①法令、教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画、学習指導要領及び教職課程コアカリキュラムへの対応が図られているか	A
	(7) シラバスの作成状況	①教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画と授業科目との関係、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容等が明確に記載されているか	A
	(8) アクティブ・ラーニングやICTの活用など新たな手法の導入状況	①授業科目の到達目標に応じ、少人数のアクティブ・ラーニングやICTを活用した新たな手法を導入し、「考える」「話す」「行動する」などの多様な学びをもたらす工夫が行われているか	A
	(9) 個々の授業科目の見直しの状況	①学修成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しが行われているか	A
	(10) 教職実践演習及び教育実習等の実施状況	①教職課程において特に重要な役割を果たす教職実践演習、教育実習(学校体験活動含む)は、事前指導・事後指導を含め、大学の主体的な関与の下で適切に行われているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

令和6年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。
①電子黒板を導入し、講義内にて使用方法について演習を行った結果、学生は簡易なプレゼンテーションを実施できた。今後はより実践的な活用の修得に向けて、教員研修の実施を検討していく必要がある。 ②「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果(2025)によると、「健康課題に関する実践能力」「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」の項目が他の項目と比較すると低い傾向にある。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和7年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。	
(1)	①ICT環境としては、学生用コンピュータ室として「OA教室」が整備されている。教室内の情報端末およびプリンタ、関連するサーバが5年に一度の頻度で見直し、更新されている。なお、ICT環境として令和8年度には電子教科書の導入(学生が情報端末を所持)が決定している。 154実習室にはタッチパネル式電子黒板が整備され、通常講義のほか、模擬授業や実習報告会等では学生にも活用されている。
(2)	①養護教諭1種課程における卒業時到達目標を示し、必要な授業科目が開設されていることを確認した。「養護教諭1種課程コア・カリキュラムの履修モデル」にもとづき養護教諭1種課程以外の科目との関連性が適切に確保されていることを確認した。 ②授業科目の内容が教員養成の目標に合致しているかを確認することにより、科目間の役割分担が明確化され、教育内容の重複や不足を防ぎ、目標達成に向けた効果的な教育が提供されている。
(3)	①養護教諭1種課程にて開講されている各科目においてICTの活用指導に関連する部分においては情報教育担当教員が請け負っている。また、他の教職関連科目においてもICTを活用する際、必要に応じて該当教員がサポートに入り、円滑な講義運営が実施されている。電子黒板は講義において頻繁に使用されている。 ②到達目標は、文部科学省に提出した科目目標に基づき、適切な水準となっている。情報関連科目および教職課程科目内の情報関連部分における学修量は、授業評価調査より、30分から60分程度であり、規定の時間通りとなっている。
(4)	①教育課程全体を通じて1単位あたり45時間の学修時間を確保することを目標に掲げ、この目標を達成するため、キャップ制を導入し、年間の履修可能な単位数を最大50単位に制限している。これにより、各科目に割り当てられた授業時間、課題、予習・復習などの自主学修時間が適切に確保され、学生の過度な負担を防ぎながら、質の高い学修が行える体制を整えている。
(5)	①「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果(2025)をもとに、学修成果を踏まえて教育課程の充実が図られているか確認している。教育実習においても、実習校を巡回し、実習指導者からの意見を「実習校巡回記録」にて共有している。
(6)	①授業科目の内容及び方法等についてシラバスに明記している。教員免許取得に適合した教育内容の設定について、文部科学省教職課程コアカリキュラム(令和3年)を網羅していることを確認し、専門的知識と実践的能力を統合的に育成できるよう工夫している。
(7)	①学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法を目指し、シラバス記入要領にもとづいてシラバスを作成し、シラバスチェックリストで内容確認した。 教員の養成の目標及び目標を達成するための計画と授業科目との関係、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容等が明確に記載されている。
(8)	①養護教諭1種課程の履修者は2年次以降は10名前後である。講義中、必要に応じ随時ディスカッションやグループワークが行われている。本学LMSであるGoogleWorkspaceにあるGoogleFormを活用した健康観察や、GoogleMeetを活用したオンライン健康相談の演習を行っている。また、講義終了後は提示されたリンク先の「授業評価アンケート(GoogleForm)」に電子機器から回答の入力を行っている。 近年、小・中学校にて導入されているタッチパネル式電子黒板の活用に向けた演習も複数の科目で行われている。
(9)	①「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果(2025)をもとに、個々の学修成果を踏まえて教育課程の充実が図られているか確認している。 また、授業毎のリアクションペーパーやセメスター毎の授業評価アンケートを用いて学生の学修状況を把握し、学生の疑問や課題に対応する取り組みを行っている。
(10)	①教職実践演習 ・子どもの現代的健康課題について本学の各専門領域の教員がオムニバスで講義を担当し、多職種連携の基礎を培っている。 ・特別支援学校へのフィールドワークを行い、特別支援学校の特色や養護教諭と看護師が連携した医療的ケアの実践について学ぶ機会としている。 ・学外の実務家として高等学校の養護教諭、小・中学校のスクールカウンセラーをゲストティーチャーとして招聘した。 ②養護(教育)実習 ・大学が主体的に教育委員会や実習校(小・中学校)との連絡調整を行い、円滑な実施体制を構築している。 ・看護学の臨地実習との連関を考慮しつつ、学校現場における養護教諭の職務を深く理解できるよう、実習校と緊密に連携した養護実習計画を策定し、各校の計画に沿って適切に実施されている。 ・養護実習の実施に際しては、事前指導において、学校保健活動の実践のほか、学校安全や保健教育、個人情報の保護、児童生徒への接し方等のオリエンテーションを徹底している。また、事後指導では、実習での学びを振り返る養護実習報告会を実施し、自他の成果と課題を共有するとともに養護実践力の伸長を図っている。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。

- (1)現在、小中学校等ではGigaスクール構想が進められ情報機器や設備の拡充が進んでいる。それらへの対応のために情報機器やネットワーク設備及び電子黒板を整備し教育現場においてもICT機器を活用できる人材の育成に取り組んでいる。
- (2)教員に求められる資質能力はその時代背景とともに変化することからも多いことから、実務家系教員による学校現場の実情に合わせた確かな指導が行えるよう役割分担を行っている。
- (3)情報関連科目においては、本学の情報系担当教員が引き受け、必要に応じて他の教職教員を支援することでICT機器や情報サービスを活用した講義運営を行っている。学生の情報関連科目の学習時間は必要単位数に見合った学習時間を確保している。
- (4)(6)(7)各授業の開始時にシラバスの周知を図る。また、教育方法として講義・演習・グループワーク・フィールドワーク・養護実習など、学習の定着を図れるよう工夫している。教育実習においては、実習施設ごとの学習内容の差異が少なくなるよう担当教員がきめ細やかな指導を行った。
- (5)(9)全学年を対象として年度末に「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査を実施している。その結果、すべての項目でおおむね修得できている(「とてもできる」「少しできる」)ことが確認できた。なかでも、「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」「根拠に基づき個別・集団への支援を計画的に実践する能力」の修得が高かった。
- (7)シラバスの作成においては、各科目における授業目的・到達目標とディプロマ・ポリシー(卒業時に期待される能力)との関連について再検討した。
- (8)教職関連科目の受講者は多くても40名、2年次以降は10名前後となっており少人数での講義や演習となっている。また、随時、演習やディスカッションが行われており、常に活発な授業が展開されている。
- (10)教職実践演習では、学内の各領域の教員や学外のゲストティーチャーなど幅広い講師陣のもと、学校における多職種連携の基礎を培っている。養護実習は、大学と実習校が連携し、各学校の実習計画に従って適切に実施された。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

電子黒板を導入したものの、活用が一部の教員や科目に留まっており、体系的な活用には至っていない。また、学生は模擬授業などにおいてプレゼンテーション機能を活用できているが、電子黒板の機能を活かしきれていない。PCの画面を共有しながら模擬会議を行ったり、動画や電子テキストを活用するなど、今後はより実践的な活用の修得に向けて関係科目における学修内容を検討していく必要がある。

また、コンピテンシー調査結果によると、「健康課題に関する実践能力」「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」の項目が他の項目と比較すると低い傾向にある。

【目標】

現状のICT活用状況の取りまとめと必要機材の検討、並びに、「根拠に基づき個別・集団への支援を計画的に実践する能力」「子供の健康を支える仕組みづくりができる(学校内外の連携)」授業内容の工夫等による改善を図る。

昨年度購入した電子黒板の有効な活用について、教員研修を企画、実施することができなかったため、次年度以降の課題とする。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

本学の教育理念である『人道の精神』に基づき、高度な看護実践能力と豊かな人間性を備えた養護教諭の育成に向けた学修目標は概ね達成されている。自己点検の結果、学生は看護学の専門性を基盤としつつ、学校保健の現場で求められる養護教諭の実践を支える基本的能力やヒューマンケアの基本に関する実践能力等、対人援助技術を確実に習得しており、理念と教育成果の整合性が確認された。

授業科目の配置や教育課程の編成についても概ね適切な状況となっている。今後は、教育現場のニーズを反映したカリキュラムの工夫や卒業生からのフィードバックを活用することで、社会情勢の変化や複雑化する児童生徒の健康課題等を鑑み、目標のさらなる具体化を検討していく。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)①	教職課程実習室備品リスト
2	(2)(3)(6)(7)(10)	シラバス
3	(2)	教職課程コア・カリキュラム履修モデル(履修カルテ)
4	(3)①	教職課程科目リスト
5	(3)①、(8)	電子黒板活用画像①②
6	(3)①	教育方法技術論シラバス
7	(3)②	自学自習時間・情報リテラシー学習時間(授業評価アンケート結果)
8	(4)	キャップ制資料
9	(5)(9)	「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果(2025)
10	(5)	実習校巡回記録
11	(6)	文部科学省教職課程コアカリキュラム(令和3年)
12	(8)	情報セキュリティ振り返り
13	(10)①	教職実践演習シラバス
14	(10)②	実習要項
15	(10)②	養護実習実施計画(例)
16	(10)②	2025年度 事前事後指導授業概要

担当

教職課程専門委員会

③

学修成果の把握・可視化

1. 自己点検・評価

(評価区分) S: 取り組みが卓越した水準である。 A: 取り組みが概ね適切である。 B: 課題があり努力が必要である。 C: 抜本的な改善が求められる。 D: 取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
「大学全体レベル」	(1) 成績評価に関する全学的な基準の策定・公表の状況	①成績評価基準に基づく評語と授業科目ごとに定められている到達目標の達成水準との関係等が明らかにされているか	A
	(2) 成績評価に関する共通理解の構築	①同一名称の授業科目を複数の教員が分担して開講している場合に成績評価の平準化を図ることができているか	A
「学科等レベル」	(3) 教員の養成の目標の達成状況(学修成果)を明らかにするための情報の設定及び達成状況	①教員の養成の目標の達成状況を明らかにするための情報※2が適切に設定されており、それがどの程度達成されているか ※2: 例えば、卒業時の教員免許状の取得状況や教職への就職状況のほか、所在する都道府県教育委員会の策定する教員育成指標や「教学マネジメント指針」を参考としつつ各大学において設定することが考えられる。	A
		②教職実践演習に向けた「履修カルテ」を適切に活用できているか	A
「授業科目レベル」	(4) 成績評価の状況	①各授業科目の到達目標に照らしてできるだけ定量的又は定性的に達成水準を明らかにし、厳格に点数・評語に反映することができているか	A
		②公正で透明な成績評価という観点から達成水準を測定する手法やその配点基準があらかじめ明確になっているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

令和6年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。
令和6年度の秋田県学校教諭等採用試験合格者は、大学推薦選考の1名のみだったことから、現役合格の困難さを感じ、将来の進路、就職に危機感、不安感をもつ学生がいることが考えられる。次年度以降も、児童生徒数減少に伴う学校数減少等の理由により採用予定者数の調整が行われることが予想されることから、現役生、既卒生の継続的な支援が課題である。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和7年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。	
(1)	①単位認定にあたっては、大学全体の共通基準に基づき、「S・A・B・C・D」の成績評価を実施している。これに加え、f-GPA(教職用GPA)による評価制度を導入しており、養護教諭1種課程の選考の際もf-GPAを用いている。 総合成績がC以上であることを合格基準として、学長の認定により適切に単位を付与している。
(2)	①複数の教員が担当するオムニバス形式の授業科目においても、科目ごとに明確な到達目標と成績評価基準を設定し、担当教員間での共有を徹底している。これらの基準をシラバスに明記し学生に周知することで、成績評価の透明性を担保するとともに、組織的な教育の質保証(内部質保証)を推進している。
(3)	①養護教諭1種課程の学生を対象に、行動目標の達成度を把握するための「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査を年度末に継続して実施している。令和7年度の調査結果(8セメスター)では、特に「専門職として研鑽し続ける基本的能力(3.75)」「教員としての養護教諭の実践を支える基本的能力(3.64)」「ヒューマンケアの基本的に関する(3.63)」において高い達成度が確認された。 ②「履修カルテ」を活用し、「目指す人材像」や「具体的な行動目標」と照らし合わせ、学生へのフィードバックや次年度の指導改善に直接活用している。

(4)	①各授業科目のシラバスには、到達目標に照らした成績評価の配点基準を具体的に記載し、評価の達成水準を可視化している。また、成績評価に関する疑義申立てに対しても、大学の規程に基づき適切かつ迅速に対応できる体制を維持している。 ②授業で課したレポートや実習報告会は、ルーブリック評価表等を用いて評価している。評価結果は評価表と併せて学生にフィードバックしている。
-----	---

4.長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。	
(1)	全学的な評価基準を教職課程においても厳格に適用し、客観的な成績判定を行っている。これにより、学修成果に対する公正な評価を担保し、学生の学修意欲の維持と教育の質の維持に努めている。
(2)	養護教諭1種課程の全学生を対象とした「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査を毎年継続して実施している。学生自らが自身の資質・能力の推移を定期的に測定し、自己評価を繰り返すことで、卒業時の到達目標に向けた課題を明確化している。このプロセスを通じて、学生が在学中から養護教諭としての専門性を強く意識し、高い目的意識を持って主体的に学修に取り組む姿勢を育んでいる。
(3)	1年次より「履修カルテ」を導入し、教職および養護に関する科目の学修状況に加え、学外活動、ボランティア、サークル活動等の多角的な記録を蓄積している。これらの記録に基づき、教員が定期的に自己評価の確認と個別指導を行うことで、教職への適性確認や、学生一人ひとりの状況に応じたきめ細かな学修支援を実現している。
(4)	オムニバス形式や複数の教員が分担する科目においても、到達目標、授業方法、および詳細な評価基準について教員間で共通理解を図る体制を構築している。これにより、評価の主観性を排した透明性の高い成績評価を実現するとともに、課程全体としての教育の質保証（内部質保証）を組織的に推進している。

5.問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。	
【課題】	
・令和8年度公立学校教員採用選考試験において、一次試験合格者（大学推薦含む）3名に対し、最終合格者は1名に留まった。	
・近年の教職員の定年延長や児童生徒数の減少に伴う採用予定者数の抑制など、厳しい社会情勢を背景に、学生が将来の進路に対して強い不安感を抱いている現状がある。	
・秋田県内における採用枠の動向を注視しつつ、県外の採用状況や多様な進路選択肢（大学院進学、臨時講師、看護師等）に関する情報提供、および筆記・面接試験対策のさらなる個別最適化と組織的な強化が喫緊の課題である。	
【目標】	
・2025年度コンピテンシー調査の結果を精緻に分析し、学生個々の強みと課題を明確化した上で、授業内容のさらなる充実を図る。	
・採用試験対策の早期化・高度化を推進するとともに、本学のアドバイザー制度を活かし、学生の心理的負担に対するメンタルケアやキャリアカウンセリングを丁寧に行う。これにより、学生一人ひとりが高い志を持ち続け、自律的に自己実現を果たせるよう、伴走型の指導体制を構築することを目標とする。	

6.全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。	
【教育理念・学修目標】	
・本課程の教育理念である『人道の精神』に基づき、看護学の高度な専門知と養護教諭の専門性を融合させた学修目標は、着実に達成されている。	
・自己点検の結果、学生は単なる知識習得に留まらず、児童生徒の心身の健康課題に寄り添うヒューマンケアの実践力を修得しており、本学が掲げる人材養成目的と教育成果の高度な整合性が確認された。今後は、複雑化する学校現場のニーズを適時目標に反映させ、理念の具現化をさらに推進する。	
【授業科目・教育課程の編成実施】	
・教職課程コア・カリキュラムに準拠した体系的な編成により、4年間を通じた段階的な学びが確保されている。特に、電子黒板等のICT機器を駆使した模擬授業の導入は、学生の『実践的指導力』の向上に大きく寄与した。	
・点検を通じて、科目間での活用状況に差異があるという課題が明確化されたが、今後は各教員が自己研鑽を通じて担当科目に応じた最適な活用方法を探求し、教育実践のさらなる高度化を目指していく。こうした教員個々の創意工夫の積み重ねにより、課程全体の質保証サイクルをより強固なものとしていく。	

7.根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)①	学生便覧2025
2	(2)①、(4)①	シラバス
3	(3)①	「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果（2025）
4	(3)②	履修カルテ
5	(4)②	評価表

担当

教職課程専門委員会

④

教職員組織

1. 自己点検・評価

(評価区分) S: 取り組みが卓越した水準である。 A: 取り組みが概ね適切である。 B: 課題があり努力が必要である。 C: 抜本的な改善が求められる。 D: 取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

「大学
全体
レベル」※3
「学科
等
レベル」
「授業
科目
レベル」

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
(1)	教員の配置の状況	①教職課程認定基準(平成13年7月19日教員養成部会決定)で定められた必要専任教員数を充足しているか	A
(2)	教員の業績等	①担当授業科目に関する研究実績の状況、担当教員の学校現場等での実務経験の状況	A
(3)	職員の配置状況	①教職課程を適切に実施するため、事務組織を設け、必要な職員数を配置できているか	A
(4)	FD・SDの実施状況	①いわゆる教科専門の授業科目を担当する教員や実務家教員も含め、教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画への理解をはじめ教職課程を担う教員として望ましい資質・能力を身に付けさせるためのFD・SDが確実に実施されているか	A
		②適切な内容※4が実施できているか ※4: 例えば教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の共有のほか、「教学マネジメント指針」を参考としつつ内容を検討すること考えられる。	A
		③実際に参加が確保できているか	A
(5)	授業評価アンケートの実施状況	①個々の授業科目の見直しに繋がるFDの機会を活用できるように、効果的な授業評価アンケートの作成・実施が行えているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

令和6年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。

特に目立った課題は見られないが、担当教職員の充足の維持、各々における継続的な自己研鑽が望まれる。また、秋田県における教員採用試験の方法が大幅に変更された。そのため、実施した採用試験問題の分析等をする必要がある。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和7年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。

(1)	必要人数は充足している。教員の退職に伴う引継ぎも円滑に実施されている。
(2)	文科省並びに学内の教員審査を経ており、研究実績並びに実務経験は十分といえる。
(3)	事務局学務課内に担当者を配置し、必要十分な状況である。
(4)	①実施できている。1月に秋田県教育庁から人事担当者を招き「教員採用の現状について」講話を受けた。 ②学生とともに「R8採用試験概要」「秋田県の現状と取り組み等」「秋田県が求める教師像」などについて説明を受けている。欠席した教員にも使用した資料を共有し、情報共有されている。 ③参加できている。
(5)	各講義終了後に、授業評価を実施している。適宜、教員自身でも学生の振り返り調査を実施している。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。

- (1)基準に沿った必要専任教員数を充足している。
(2)文科省や学内における教員審査を受け、必要十分な研究実績と実務経験を有している。
(3)適切に事務担当者を配置している。
(4)秋田県教育庁から教員採用人事担当者をお招きし、求める教師像や採用、教師としてのやりがいなどについて学んでいる。
令和8年度教員採用試験から秋田県における教員採用試験の方法が大幅に変更されたことや大学3年生から受験できる機会が設けられたことなども含めて、県の人事担当者から直接変更点や注意、教育者としての思い等について話を聞く機会を設けている。
(5)授業最終回の授業評価のほか、必要に応じ、授業の振り返り調査などを実施している。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

特に目立った課題は見られないが、担当教職員の充足の維持、各々における継続的な自己研鑽が望まれる。
また、秋田県における教員採用試験の方法が大幅に変更されている。引き続き、採用試験問題を分析しデータを蓄積していく必要がある。

【目標】

教職員における充足の維持及び自己研鑽が望まれる。
秋田県教員採用試験における方法の変更を受け、試験状況の分析、データの蓄積を実施していく。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

教員組織は基準を満たして適切に配置され、各教員が研究実績や実務経験を活かした指導を行っている。事務体制も学務課内の担当配置により組織として十分に機能している。
また、秋田県教育庁と連携した教員採用試験対策や、教員採用試験の変更に伴う試験問題の分析など、地域の動向に合わせた主体的な取り組みが進められている。
今後も現状維持に留まらず、継続的な自己研鑽とFD・SDの推進により、さらなる教職課程の質向上に努める。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	3(1)	教職課程認定基準
2	3(2)	担当教員
3	3(3)	事務組織図
4	3(4)①②	教職FDSD資料表紙

担当

教職課程専門委員会

⑤

情報公表

1. 自己点検・評価

(評価区分) S: 取り組みが卓越した水準である。 A: 取り組みが概ね適切である。 B: 課題があり努力が必要である。 C: 抜本的な改善が求められる。 D: 取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

「大学全体レベル」

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
(1)	学校教育法施行規則(昭和22年文部省令第11号)第172条の2のうち関連部分、教育職員免許法施行規則第22条の6に定められた情報公表の状況	①法令に定められた情報公表が学外者にもわかりやすく適切に行っているか	A
(2)	学修成果に関する情報公表の状況	①大学が必要な資質・能力を備えた学生を育成できているかどうかを、エビデンスとともに説明できているか	A
(3)	教職課程の自己点検・評価に関する情報公表の状況	①根拠となる資料やデータ等を示しつつ、わかりやすい自己点検・評価の評価書を公表することができているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

令和6年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。

養護教諭一種課程の自己点検・評価に関する情報の公表について、大学事務局と連携の上、速やかに公表体制を構築し決定することが課題であった。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和6年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。

(1)	学外者(社会一般)に対しては、本学ウェブサイト、「大学案内(キャンパスガイド)」等にて公表をしている。
(2)	卒業者の教員免許状の取得の状況、卒業者の教員への就職の状況等、学修成果に関する情報公表をウェブサイト上で行っている。
(3)	1期生が卒業した完成年度(令和4年度)以降の実績等を踏まえ、作成した「教職課程自己点検・評価報告書」を本学ウェブサイト上にて適切に公表している。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。

(1)～(3)法令に基づく情報や学修成果、自己点検・評価結果について、本学ウェブサイト上で適切かつ分かりやすく情報公開を行っている。本学では、赤十字の理念である「人道」を建学の精神とし、それに基づく生命の尊厳と人間性の尊重の上に、教育理念を定め、教育目的・目標を定めている。教育理念・目的は、学生・教職員に「学生便覧」等で周知し、同時に、地域社会に向けても本学ウェブサイトで公表し、教職課程の透明性を確保している。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

教職課程に関する各種情報や自己点検・評価報告書の公表体制は構築されたが、今後は、より見やすくアクセスしやすい情報提示の工夫が求められる。

【目標】

公表している各種データ(学修成果や自己点検・評価結果等)について、最新の情報を迅速に更新・蓄積するとともに、エビデンスに基づく分析結果を視覚的にも分かりやすくして発信していく。

6.全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

【教育理念・学修目標】

・秋田県内唯一の養護教諭一種免許状を取得可能な高等教育機関として、看護師養成の高度な学修基盤と養護教諭専門科目を密接に連携させた教育を展開している。これにより、医学的知識に裏打ちされた高い専門性を有する養護教諭の育成を実現している。

・現代社会の多様なニーズに対応できる「実践的指導力」を備えた教員を養成すべく、情報公開を積極的に進め、学生が主体的に学修に取り組める環境整備と意欲向上に努めている。

【授業科目・教育課程の編成実施】

・教職課程専門委員会を定期的開催し、教育職員免許法および教職課程コア・カリキュラムに基づいた点検を行うことで、授業内容の整合性と体系性を維持しており、編成は適切である。

・最新の学校保健課題を反映したシラバスの更新や、アクティブ・ラーニングの導入により学修の質を高めている。

7.根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)(2)(3)	本学ホームページ

担当

教職課程専門委員会

⑥

教職指導(学生の受け入れ・学生支援)

1. 自己点検・評価

(評価区分)S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(一)ハイフン

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
(1)	教職課程を履修する学生の確保に向けた取組の状況	①教職課程に関する積極的な情報提供の実施ができているか	A
		②教員の養成の目標に照らして適切に学生を受け入れているか	A
(2)	学生に対する履修指導の実施状況	①必要な体制や施設・設備を整えた上で、個々の学生の教職に対する意欲を踏まえつつ、学生に教職課程の履修に当たって学修意欲を喚起するような適切な履修指導が行えているか	A
		②「履修カルテ」を適切に活用できているか	A
(3)	学生に対する進路指導の実施状況	①学生に教職への入職に関する情報を適切に提供するなど、学生のニーズに応じたキャリア支援体制が適切に構築されているか	S

2. 前年度に指摘した問題点

令和6年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。

・教職履修の困難さや教職の社会的評価が背景となり、1年生の希望者が減った。今後は、教職の魅力をもっと語りながら、夢と目標を持ち挑戦する学生を増やしたい。
・実習に関しては、10～11月に次年度の実習受け入れ依頼を行い、実習先の確保に努めているが、学校数の減少等により秋田市教育委員会も苦慮している。今後は、実習校の確実な確保に向けた方策を検討し、実り多い実習を保障できる基盤を整えていく必要がある。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和7年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。

(1)	県・市教育委員会と密接に連携を図り、必要に応じて訪問し協議するなど、教職課程に関する積極的な情報交換を行っている。一方で、全国的に教職志望者が減少しており、魅力ある職業であることは認識しているものの、業務の困難さやワーク・ライフバランスの観点から敬遠されがちである。このネガティブなイメージを払拭し、教職の魅力をもっと周知するには至っていない。
(2)	教職課程専門委員会において、必要な指導体制を整えるとともに情報交換を密接に行い、得られた情報を基に適切に学生への働きかけを行っている。その都度、履修カルテに記載させ、年度末には指導担当者による確認と指導を行っている。
(3)	・学生相互の活動として、2月中旬に養護教諭及び養護助教諭として活躍している既卒生を迎え、講話並びに情報交換の場として学生交流会を設けた。 ・秋田県教職キャリア協議会のメンバーと連携し必要な情報を得て、適宜情報を提供している。 ・教員採用試験対策の補講に秋田県教育委員会を招聘し、採用動向や県の特徴などについて伺い、採用試験突破に向けた構えを整えている。 ・本学教職課程教員が学年を分担し、教職課程履修者(1・2学年の履修希望者を含む)と教職面談を行い、指導・支援並びに情報交換を図っている。 ・採用試験受験後には、試験内容について報告カードの提出を促し、採用試験情報を蓄積している。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。
求められる養護教諭の育成を念頭に、秋田県教育委員会・岩手県教育委員会と本学教職課程専門委員会教員とで密接に連携を図ることができた。各県教育委員会の要望や期待する教員像を捉え、教職課程の学生への指導に役立てている。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

- ・近年、採用枠が少ない状況が続いている。秋田県では大学推薦を得ても合格できない状況がある。そのため、教職に就きたくても敬遠する傾向が散見される。
- ・奨学金の返済のため、看護師を経たから養護教諭を目指す学生が増えている。
- ・教職履修の困難さにより、2年生から教職志望者が減少傾向にある。今後は、教職の魅力化をさらに図り、夢と目標を持ち、挑戦する学生を増やす必要がある。
- ・実習に関しては、10～11月に次年度の実習受け入れ依頼を行い、実習先の確保に努めているが、学校数の減少等により秋田市教育委員会も苦慮している。今後は、実習校の確実な確保に向けた方策を検討し、実り多い実習を保障できる基盤を整えていく必要がある。

【目標】

- ・養護教諭は学校の心理的・社会的なウェルビーイングを実現するために重要な役割を果たす。養護教諭の魅力ややりがい、求められる教員像を自覚し、憧れを持って粘り強く学び続けることができる学生を増やすことを目指す。
- ・教職の魅力についてさらに理解を促すとともに、本学における合格実績を積み上げる。
- ・採用試験突破に向けて、既卒者も含めて支援を継続できる体制の確立を目指す。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

秋田県教育委員会や近県教育委員会と本学との信頼関係が構築できている。本学の特徴である看護の強みを生かし、社会に必要とされる養護教諭の育成に一層取り組んでいきたい。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)、(2)、(3)	教職課程専門委員会議事録
2	(1)、(2)、(3)	履修カルテ
3	(3)	教員採用試験報告カード

担当

教職課程専門委員会

⑦

関係機関等との連携

1. 自己点検・評価

(評価区分) S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。 C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
(1)	教育・委員会や各学校法人との連携・交流等の状況	①教員の採用を担う教育委員会や各学校法人と適切に連携・交流を図り、地域の教育課題や教員育成指標を踏まえた教育課程の充実や、学生への指導の充実につなげることができているか	S
(2)	教育実習等を実施する学校との連携・協力の状況	①教育実習を実施する学校と適切に連携・協力を図り、実習の適切な実施につなげることができているか	A
		②学校体験活動や学習指導員としての活動など学校現場での体験活動を行う機会を積極的に提供できているか	B
(3)	学外の多様な人材の活用状況	①学外の諸機関との連携の下、教育課程を充実するために学外の多様な人材を実務経験のある教員又はゲストスピーカー等として活用することができているか	S

2. 前年度に指摘した問題点

令和6年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。

教員採用支援対策は組織化され充実している。しかし、定年延長や再任用制度により、教員の新規採用数の募集定員が年々減少傾向にあり、採用状況は依然として厳しい状況にある。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和7年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。

(1)	・秋田市教育委員会や関係市町村を訪問し実習依頼や御礼を継続し密接な関係構築に努めている。 ・県のキャリア協議会としての立場から関係各位と連携し情報交換を活性化している。 ・本学教職課程教員が、秋田大学の非常勤講師として出講し、秋田大学との連携を図りながら、教員養成機関として体制強化を図っている。 ・秋田県教育委員会・養護教諭部会からの講演依頼を受け、本学教職課程教員が本県並びに各組織に貢献することで関係機関との協働関係を構築することができている。 ・大学推薦の意義や学内の指導性について、県教委とも対話を通し連携してきた。来年度から大学推薦選考の改善が図られる見込みである。
(2)	・実習依頼時期を早めていることで、各市町村教育委員会との連携が円滑に図られている。 ・実習期間中において、本学の指導教員が各実習校を訪問し、適切に連携・協力を図っている。 ・管理職への挨拶や実習指導者である養護教諭と情報交換を行い、実習生への指導に生かしている。 ・早い段階から学校現場に触れる機会を積極的に推奨していることから、自主的に学習指導員や部活動指導員、ボランティア活動等に参加している学生もいるが、現状では単なる「アルバイトやボランティア」に留まり、教職への資質向上に組織的に結びつけられていない。
(3)	・教員採用試験に係る特別講座として、秋田県教育委員会の担当者等を招聘し、教職の魅力を伝える講義を実施している。 ・補講では、本学の4年生に依頼し、受験突破へ向けた経験や情報提供の場を設けている。 ・教職実践演習では、特別支援学校へのフィールドワークを行っている。また、学外の実務家として高等学校の養護教諭や小・中学校のスクールカウンセラーを招聘している。 ・子どもを取り巻く現代課題について本学の専門性を有する教員が講義を担当している。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。
 実習期間中は、実習校に本学教員が訪問し、実習生への現場指導と指導者との情報交換に努めている。
 実習中の学生をつまづきの把握や要望を受け、各実習校との連携・調整を図っている。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。
【課題】
 ・教員採用試験対策を充実させてきたが、定年延長や再任用制度により、新規採用の募集定員が年々減少しており、採用状況は依然として厳しい状況にある。一方で、教職を志す学生の意欲を持続する必要がある。
 ・体験活動が教職課程のカリキュラムや指導体系の中に明確に位置づけられておらず、活動前の事前指導や、活動後のリフレクション(振り返り)を大学側が組織的にフォローできていない点が課題である。
【目標】
 ・秋田県教育委員会との連携強化に努め、教員採用試験の実績向上につなげていく。将来的には、大学推薦枠の増枠を目指す。日々の講義の質を高めることを重視するとともに、学外の人的資源を活用し、教職の魅力を高めていく。
 ・既存のネットワークを有効活用しながら、養護実習に留まらない多様な「学校体験プログラム」の受入枠を段階的に新規開拓・拡大していく。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。
 本学教職課程教員は、現場における学校経営経験、教育委員会勤務、養護教諭としての実務経験等、豊かな実務経験を有している。また、授業支援や講演活動などを通し、県・市教育委員会や学校教育現場とよりよい関係性を築くことができている。今後は近県にもこうした関係構築が拡大していくように努めたい。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)、(2)、(3)	教職課程専門委員会議事録
2	(3)	特別講座振り返り、同御礼状